

受験番号

写

氏名

次の文章は、小説「アンデスの声」(宮下奈都作)の一部です。ふだんはなれて暮らしている祖母から、祖父が倒れたという知らせを受けた場面に続く部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

答えは問二十以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問二十の答えは国語A・帰国一六の解答らんに書きなさい。

祖母から知らせを受けたとき、ア目の前にはつと広がった光景があった。古いファイルがクリックされ、イカチツと動画が開かれる。そんな感じだった。ファイルがあつたことも忘れていた。ずいぶん長く更新されることもなかった。それなのに、こんなにあざやかだ。

青い空をバックに高い山がそびえ、すそ野から澄んだ湖が広がっている。湖のほとりには赤い花が咲き乱れ、そこに群がるように虫や小さな鳥が羽ばたいている。

そのあざやかな映像は、うかんだときと同じくらい唐突に姿を消し、あとは頭をゆすつてみても目を閉じてみても、うつすらと残像がうかぶばかりで焦点を合わせることはできなかった。

どこだろう、と私は車の助手席で考えた。いつか、たしかに見た景色だ。でも思い出せない。あの高い山は、富士山だろうか。印象としては、もっと鋭角で、高い。手前の湖と、ほとりに群生していた赤い花は、と思いをはせたとき、何か別の赤い花がウ記憶の底からうかび上がってくるのがわかった。

子どものころ、私は二度、母以外の人と暮らしたことがある。一度目が祖母父だった。子細を覚えていてるわけではない。預けられた事情も、時期も、期間も、確かめていない。私は母とはなれ、田舎の大きな家で祖母と暮らした。

その軒先から見わたせる田畑を今でもよくつきりと思いうかがえることができる。あれは、まだ小学校に上がる前の、たぶん春先だ。

母が手をふって去っていった後の縁側に私は腰かけていた。庭といつても農作業するのに必要なただっ広い場所、そこには子どもの喜びそうな色味のあるものなどひとつも見つけられそうになかった。

庭に積み上げられた薪をばんやり眺めていた私は、そのずつと向こうに何かがあることに気づいた。風がふいたとき、何か色のついたものが動いた気がしたのだ。私は立ち上がり、垣根の向こう側一面に赤紫が広がっているのを見た。縁側からすべりおり、踏み石の上に並べてあつたはき古された草履をつつかけた。そうして庭の端までかけていき、垣根の間隙からのび上がって向こうをのぞいた。

そのとき眼前に広がった光景が、今、ゆらゆらと立ち上ってきている。

曇った早春の空の下に赤紫色が風にゆれていった。ぱちんと世界が切りかわったような、そこだけが生きて動いているような見事な赤紫だった。

「あれか、あれはレンゲ草や」

庭先に出てきた祖父が教えてくれた。どうやらそれは赤紫色の花らしかった。

「あんなもののどこがめずらしいんや」

そう、首をひねった祖父も、

「じいちゃんはお花畑があつていいね」

私に跳ねまわられて、やがてつられて笑顔になつていった。

「瑞穂の好きなだけつんでいいよ」

祖母もにこにこした。私は夢中になつてかかえきれないほどのレンゲ草をつんだ。はずだ。正直にいうと、つんでいるときは覚えて

いない。祖父がいて祖母がいて、あたり一面の赤紫とむせかえるような土の匂いがよみがえるだけだ。

花は染しみのために作っているのではなく、田んぼの土の栄養のために裏作で植えられているのだとずいぶん後になってから知った。あの赤紫は、田植えの時期になると鋳で土の中に鋤きこまれてしまうという。

いつときだけ、父とも暮らした。母と私の家へときどきやってくる父は遠い街に住んでいた。そこへ、母と共に引越したのだ。荷造りした鍋やちゃんや服や本をトラックにのせ、母と私は電車で行った。何時間もかかつて着いた街には、高いビルがしゃんしゃんと建つていて目がまわりそうだった。人が多すぎて息が苦しい。ほんとうにこんなところに人が住めるのかとIがふくらんだ。その街にいた間じゅうずっと、Iがしばむことはなかった気がする。

半年ほどで元通り父とは別れて暮らすことになった。これでもどれる。私が真つ先に感じたのは、これでもどれるという静かなIIだった。ようやく友達ができはじめていた小学校をまた転校するIIIや、父のいない子どもにもどる体裁の悪さは後からゆつくりと追いかけてきた。

そのときに、胸の奥に赤い花が咲いていた。赤い花のところへ帰れる、となぜだか私は思ったのだ。それを今、不意に思い出している。病院へと走る車の窓に、暗い水田が映る。あのころはこの辺もレンゲ草だらけだった。ここで無数の赤い花が風にたなびいていたはずだ。

5そうして小さな違和感に気づく。何か大事なことを忘れている。もどつておいでと叫んでいる。私が、ではない。私の中の赤い花が、だ。ゆれる赤い花が頭からはみだし、眼の裏側までこぼれてきたときにはととした。この花はちがう。赤いけれどレンゲ草ではない。

なんだろう、この花は。青い空に映えてゆれる花は、レンゲ草のように華奢ではない。もつと花びら全体が赤くて迷いが無い。そして、濃い匂い。甘くしびれるような匂いを放っている。さそわれるように羽音が近づく。虫や鳥が集まってくる。

祖父の病室は二階のナースステーションのすぐ脇だった。容態が落ち着くまで、頻りに様子を見るためのだろう。引き戸式のとびらは開け放たれ、祖母の姿はなかった。中のベッドに小さな人が寝ている、と思った。それが祖父だった。

声をかけるのがためらわれるほど、薄掛けをまとった身体は小さくしぼんで見えた。母も同じ気持ちだったかもしれない。私たちは何もいえずにベッドに近づき、ねむっている祖父の顔を見下ろした。

いつのまに、こんなに枯れてしまったんだろう。気づくと、涙がにじみ出てきていた。いけない、こは泣くところではない。そう思つて唇を

かんだけれど、鼻の奥がフーンとしている。

そのとき祖母が病室に入ってきた。

「来てくれたんか」

にこにこしている。

「だいじょうぶやっていったやろ。ただの**カロウ**やって」
 そういいながらベッドの脇の折りたたみ椅子を引き出し、こちらにすめてくる。

「いいよ、自分でやれるよ」

祖母も小さくなった。ただ、深いしわが寄つてはいても、ふつくらとした頬は張っている。それを見て少し安心した。

「①」母が泣いていた。声も立てずはらはらと涙を流している。こめんなさい、といっている。聞こえないふりをした。泣いたりあやまつたりするのはちがうと思った。でも、それは私が小さくなった祖父の孫であるからで、娘にはまた別の思いがあるのかもしれない。老いた両親とはなれて暮らすことに母は責を感じていたのだろうか。②「また他にあやまらなければならないようなことがあったのだろうか。」

面会時間が過ぎ、自分が付きそうとかたくなに主張する母を病室に残し、私は祖母とあの大きな家に帰ることにした。助手席の祖母はやつぱり小さかった。シートベルトが包帯みたいで痛々しい。

祖母とふたりでもどった家も小さく感じられて私はとまどった。古い農家だから、立派だとはいわぬまでも堂々としていた。それがなんだか急にみずばらしく見えてしまう。その、みずばらしいという言葉に自分でぞつとずる。貧しいとか、ちつばけなどか、そういうのとはちがう。襦がすすけているような感じ、電灯の笠の上のほりがぬぐい切れていない感じ。歳をとったふたりには大きな家が手に負えなくなっているのだ。家が悪いのではなく、つまり、住む人が家に追いつかなくなつた。

翌朝、しばらく迷つたけれど、会社を休むことにした。祖父の具合は悪くはなさそうだし、この家からでも出勤できないわけではない。それでも、もう少しここにいて祖母の役に立ちたかつた。私はあの子の何もできない幼児ではない。祖母にはきつくなつた掃除の手伝いくらいはできる。それに、ここに居る間に、赤い花の呼ぶ声をもう一度聞きたいとも思った。

赤い花、赤い花、と歌うようにくり返しながら私は欄間や高い筆笥の上にはたきをかけ、障子の棧をふき、床に雑巾をかけた。家はまだまだ半分もきれいにならない。赤い花の正体もつかめない。レンゲ草より大きくて、はなやかで、甘い匂いがする。祖母に聞いても知らないという。

久しぶりにこの家の中をじっくりと見てまわつて、台所に日めくりカレンダーがかけてあることに気がついた。一日に一枚、花の絵が描かれ、あとは日にちを表す数字と、その横に小さく曜日が入っているだけだ。カレンダーはいらん、といつていた祖父の力強かつた口ぶりを思い出す。

そうだね、と私は光のささない台所でコップに水をくみながら、声に出してみる。祖父がカレンダーを気にしなかつた分、祖母がひそかに気をつけなければならなかつたこともあつたろう。一日分の日にちと、とりに曜日が寄りそうように書かれたカレンダーは、10「一日だけを眺めて暮らしていた祖母によく似合つた。」

午後の面会時間待って病院を訪ねると、祖父も母も静かな顔をしていた。念のために祖父はしばらく入院することになるそう。

「なんでもねんや、大げさなんや」

祖父はねたま笑つてみせ、それから**マガオ**になつて私にいった。

「瑞穂、仕事はどうした」

「あ、今日はちよつと」

「休んだんか」

祖父の太い眉が寄せられる。気に入らないのだろう。

「明日は行くよ」

私がいうと、傍から祖母も口ぞえしてくれた。

「じいさんを心配して休んでくれたんやがの」
 「おまえの仕事ちゆうのは、ほんないい**カゲン**なものなんか」
 これならだいじょうぶだ、と私は思った。いつもの祖父だ。
 それで、その日の晩、母と私は町へ帰つた。11判断をまちがえたとは思われない。祖父自身がそれを望んだ。

次に面会に行つたとき、祖父は急速におとろえて、一日の大半をねむつて過ごすようになっていた。祖母から容態の説明を受けながら、私はきつと泣くまいと心に決めた。そう決めておかなければ泣いてしまふかもしれない。働きづめで身体をこわし、入院してから初めてかけつけて泣くようなつまらない娘と孫しか持たない祖父がふびんだつた。

それなのに、祖父の寝顔は思いがけずおだやかで、折れそうな気持ちを支えてくれる。

「今まで休まなさすぎたんだよ、少しゆっくり休んだらいい」
 動揺が少し落ち着いたらと、私は祖父にささやいた。聞こえているのか祖父の頭が小さくゆれる。

「それでまた元氣になつたら、いっぱい働けばいいじゃない」
 あわててつけ足す。祖父ならそれを望むと思つたからだ。

すると、祖父は目を覚ましたらしい。うつすらとまぶたを開き、私を認めてかすかにほほえんだ。唇が薄く開く。何かをいおうとしてふるえる。

「なに？ じいちゃん、水？」
 祖父の口もとに耳を近づけると、祖父は小さい声で、でもはつきりといつた。

「……キト」

「え、ごめん、なんていったの」

「キト」

よく聞き取れない。困つてかたわらの祖母に助けを求めようとしたその瞬間、あ、と思つた。キト。するするつと記憶のファイルが開いた。むかし、祖父の口から何度も聞いたキト、街の名前だ。

「そつだ、じいちゃん、よくキトのこと話してくれたよね」

古いファイルの中から、街の名前と、高い山と、ぬけるような青空、甘いかおりを放つ赤い花が飛び出してくる。

「キトで遊んだの、楽しかつたね」

祖父は満足そうにうなずいた。

祖母の家に預けられていたころのことだ。祖父は夕餉の後、私をひざの上にかかえて、キトという街の話をしてくれた。

その街は古代から栄えた都市で、赤道直下にあるのに、標高が高いため暑くもなく寒くもない。一年中気温が安定していて、晴れた空には富士と見まがう美しい山がそびえている。めずらしい鳥が飛びかい、あざやかな花が咲き乱れ、木々には赤い大きな実がなっている。祖父はまるで見てきたかのように街の様子を話し、幼かつた私は夢中で聞いた。その街の澄んだ空気を胸いっぱい吸った気がする。

12 祖母の家をはなれてからも、キトは私をなくさめてくれた。母の帰りのおそい晩、ひとりでふとんに入つて空想の街で遊んだ。その街にはちよつと私と同じ年ごろのきれいな女の子も住んでいて、すぐに仲よくなつて走りまわつた。さびしいときはいつでもキトへ飛べばよかった。

その、キトだ。いつから忘れていたんだろう。長い間、思い出すこともなかつた。赤い花の影が脳裏にうかんでからでさえも、レンゲ草までしかさかのぼることができなかった。祖父は今、静かにねむっている間にキトで遊ぶことができているのだろうか。それは、いいことなのか、さびしいことなのか、私にはわからない。

今夜はそばについていたいという私の申し出は母に却下された。

写

「だいたいようぶ、すぐにどうこういうことはないって」

13 私^{わたし}の背をお母の目には光がない。

「それより、ばあちゃんをお願い、瑞穂がすっかりついていてあげて」
そのとき、祖父が何かをいった。

「なあに？ じいちゃん、どうしたの？」

「ベリカード」

祖父がかすれた声を出す。

「ばあちゃんに聞け。ぜんぶおまえにやる」

そういつて祖父はまた目を閉じた。なんのことかわからなかった。ばあちゃんに聞けといっていたけど、聞かれた祖母だつて困るだろう。

ところが家に帰ると、祖母は思いがけずあの街の名前を口にした。

「キトやと、なつかしいのう」

「ばあちゃん、キト、覚えてるの？」

祖母は意外なことをいった。

「覚えてるもなも、キトやろ、忘れたりせんわ」

「キトつて、むかし、じいちゃんが話してくれたお話に出てくる街だよな？」

「はや、きれいな街やつたの。エクアドルの首都やとの」

「エクアドル？ つて、南米の？」

「赤道直下ちゆうてたな。はや、ベリカードやつたの、えんと、銀の缶に入つてたはずやけど」

祖母は黒光りする筆筒のひきだしを上から順に開けはじめた。 14 私の中

のキトがぐらりとかしく。

「キトつて、じいちゃんの頭の中の街じゃなかったの」

自分の声が聞き取れない。たしかに、キトはあった。祖父の頭の中だけでなく、私の頭や胸やきつと血液の中にもキトは入りこんでいただろう。祖母も、もしかしたら私たちふたりの会話を聞いていたかもしれない。だけどそんな話とは明らかにちがう。キトはエクアドルの首都だと祖母はいったのだ。

「あったあった、これや」

錆^{さび}のういた銀の平べったい缶を大事そうに取り出し、祖母はそのまま私に手わたしてくれた。

固いふたをこじ開けると、中に絵葉書大のカードがつまっていた。端が薄茶色に染まっているものもあり、ひと目で古いものだと思える。これがそのベリカードか。いちばん上の一枚を手に取り、裏を返した私はあつと声を上げそうになった。

キト。キトだ。胸の中にあつたあの街にそっくりの風景がそこに写っていた。富士に似た、でもさらに鋭角な尾根が、青々とした空を背景にりとそびえ、手前には澄んだ大きな湖がその姿を映している。

「キトつてほんとうにあつたんだ」

夢の中の出来事がほんとうだったと知らされたような、祖父とふたりだけでつくった架空^{架空}の街が、白日の下にさらされるような、緊張とき、弛緩^{弛緩}がまなまぜになつてやってきた。

「ベリカードつて、なに？」

そう聞く声が《×》かかっている。思わずつばを飲みこんだ。「ラジオ聴くやろ、ほの内容を書いてラジオ局に送るんや。ちゃんと聴いてたことがわかればラジオ局がベリカードを送ってくれる」

受信の証明書のようなものと思えばいいだろうか。青い鳥の写真が印刷されたカード、見たこともない果物の写ったカード、満面の笑みをたたえた少女のカード、そして、赤い花のカード。

祖母がとなりに腰を下ろす。

「なつかしい。これも、ああ、これもや、ぜんぶじいさんと集めた」

アンデスの声、と日本語で記されている。キトのラジオ局の名前らしい。「何の番組に周波数を合わせようとしてたんやつたか、たまたま飛びこんできた声があつての」

そういつて祖母は目じりにしわを寄せ、手元の赤い花のカードをじつとのぞきこむ。

遠くはなれた日本の片田舎で、祖父のラジオがエクアドルからの電波を受信する。現地の日本人向けの放送を偶然つかまえたのだろう。祖父と祖母はたぶん地図を開いてキトの場所を確かめた。そうして地球の反対側まで、つたない受信報告書を送った。ベリカードが返ってきて、ふたりは心をおどらせる。いく度も放送を聴き、いく度も報告書を書く。そうして一枚ずつベリカードが届けられる。ふたりして目をかがやかせてカードに見入ったことだろう。

そのときの様子が《×》目^めにうかぶ。私をひざに乗せて話してくれたのは、たぶん祖母とふたりでじゅうぶん楽しんでたその後だったにちがいない。 15 どこにも出かけたことのなかった祖父母に豊かな旅の記憶があつたことに私はおどろき、やがて甘い花のかおりで胸の中が満たされていくのを感じていた。

（宮下奈都「アンデスの声」の一部 『遠くの声に耳を澄ませて』より）

【注】

- 1 呵責 …… 悪いと思つて苦しむ気持ち
- 2 白日の下にさらされる …… 秘密にしていたことがみんなに知られる
- 3 弛緩 …… ゆるむこと
- 4 なймаせ …… 質のちがうものを混ぜ合わせること

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 a 子細 b 首をひねつた のここでの意味として、もっともふさわしいものをそれぞれ次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

a 子細 …… ア 正確なこと イ くわしいこと ウ つまらないこと エ むずかしいこと

b 首をひねつた …… ア ふしぎに思った イ おもしろいと思った ウ うたがわしく思った エ くだらないと思った



問三 1 庭に積み上げられた薪をほんやり眺めていた私は、そのずっと向こうに何かがあることに気づいた。 について、

(1) 「ほんやり眺めていた」時の「私」の気持ちとして、もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア この先どうなるのだろうかという不安な気持ち。
イ 祖父母の家がだだっ広くてとまどう気持ち。
ウ することが何もなくたいくつな気持ち。
エ さびしくて父や母に早く会いたいと思う気持ち。

(2) 「何か」とは実は何だったのですか。本文中からその言葉をそのままぬき出して答えなさい。

問四 2 そのとき眼前に広がった光景が、今、ゆらゆらと立ち上ってきている。 について、

(1) 「今」とは「私」が何をしている時のことですか。解答らんに合うように十五字以内で答えなさい。

私が (十五字以内) 時

(2) 「ゆらゆらと立ち上ってきている」と同じことを言っているものを次のア～エ (すべて本文中の——線が引かれている表現です) の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 目の前にぱつと広がった。
イ カチツと動画が開かれる。
ウ 記憶の底からうかび上がってくる。
エ くつきりと思いうかべる。

問五 3 高いビルがしゃんしゃんと建っていて とはどのような様子を表していますか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア 同じ形のビルばかりで区別がつかない様子。
イ 色合いがあざやかでまぶしいくらいに美しい様子。
ウ 出入りする人が多くこった返している様子。
エ いくつもの高いビルが整然と立ちならんでいる様子。

問六 空らん I III にあてはまる言葉を次のア～エの中からそれぞれ選び記号で答えなさい。記号は一度しか使えません。

- ア 不安 イ 希望 ウ おそれ エ 楽しさ オ さびしさ カ おどろき キ よろこび

問七 4 あのことろ とはいつのことですか。わかりやすく答えなさい。

問八 5 そうして小さな違和感に気づく とありますが、これはどのようなことに気づいたのですか。解答らんに合うように、本文中の言葉を指定された字数でぬき出して答えなさい。

(七字) は (十三字) ということ。

問九 6 いけない、ここは泣くところではない とありますが、このように思ったのはなぜですか。次のア～エの中から、その理由としてあてはまらないものを一つ選び記号で答えなさい。

- ア 泣いてしまったら、祖父が年老いて小さくなったことを認めることになると思ったから。
イ 今は祖父の心配をするべきであって、自分の感情を出す場ではないと思ったから。
ウ 年老いて倒れたとはいえ、祖父が死んでしまうと決まったわけではないから。
エ 泣いてしまったら、重病であることを祖父に気づかれてしまうから。

問十 空らん「①」「②」にあてはまる言葉を次のア～エの中からそれぞれ選び記号で答えなさい。記号は一度しか使えません。

- ア だから イ あるいは ウ ところで エ ところが



問十一 7 その、みすばらしいという言葉に自分でぞつとするとありますが、なぜこのように思ったのですか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア みすばらしいと感じることで、これから泊まる祖父母の家が古くてうす暗く気味の悪いところのように思ったから。
- イ 子どものころの楽しい思い出のつまった祖父母の家をみすばらしいと感じると、自分の過去を傷つけることになるから。
- ウ 祖父母の家をみすばらしいと感じたことをそのまま態度に出すと、ますます母を傷つけ、泣かせることになるから。
- エ 大切な場所である祖父母の家をみすばらしいと感じることは、祖父母が小さくなった変化を受け入れるようだったから。

問十二 8 つまり、住む人が家に追いつかなくなったとありますが、どういうことですか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア 年老いた祖父母には、大きな家のそうじや手入れをじゅうぶんにすることができなくなったということ。
- イ 年老いた祖父母は時代の変化についていけず、新しい家電製品を使いこなすことができないということ。
- ウ 祖父母が年老いて小さくなったせいで、立派で堂々とした農家がより大きく見えるようになったということ。
- エ 家族がへり二人になってしまったのに家の大きさは変わらないので、使わない部屋が多くなったということ。

問十三 9 赤い花の呼ぶ声 とありますが、何と呼んでいるのですか。ここより前の部分から七字でさがして、そのままぬき出して答えなさい。

問十四 10 一日一日だけを眺めて暮らしていた祖父母 について、

(1) ここから祖父母がどのように生きてきたことがわかりますか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア その日の計画を立て、目標を達成するように一生懸命生きてきたこと。
- イ 自然や田畑の状況に合わせ、すべきことに心をつくして生きてきたこと。
- ウ 将来のことまで考える余裕がなく、今日のことだけを考えて生きてきたこと。
- エ 長年の仕事に疲れ、毎日仕事もせずにぼんやりと田舎の風景をながめて生きてきたこと。

(2) (1)のようなあり方のことを何といいますか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを選び記号で答えなさい。

- ア 温故知新
- イ 一期一会
- ウ 謹厳実直
- エ 波乱万丈

問十五 11 判断をまちがえたとは思わない とありますが、この時の「私」の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア 祖父にしかられたが、母と面会に行き元気な祖父に会えてよかったと安心している。
- イ 母から帰らなければよかったのと言われ、自分たちが決めたことに不安を感じている。
- ウ 祖父に言われたように、一人でなく母といっしょに行動できたのはよかったと思っている。
- エ 母と町に帰ったのは、祖父の気持ちを尊重したのだからよかったのだと自分に言い聞かせている。

問十六 12 キトは私をなくさめてくれた とありますが、これはどういうことですか。解答らんにあうように説明しなさい。

とつてのこと。

問十七 13 私の背をおす母の目には光がない とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中からもつともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア 冷たい態度を取ってきた母なので、祖父の容態が悪化し、これからずっと看病するのにうんざりしているということ。
- イ 母が祖父を心をこめて看病しようとしているのに、それをじやまする無神経な娘の言葉にいらだっているということ。
- ウ 容態の悪い祖父と年老いた祖母を目の前にして、母がこれまで親孝行してこなかったことをくやみ、なやんでいるということ。
- エ 以前は祖父に泣いてあやまっていた母だが、今日は祖父の容態が落ちついたので安心して涙を流さないでいられるということ。

問十八 14 私のキトがぐらりとかしぐ とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中からもつともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア キトは私と祖父だけの秘密だと思っていたのに、祖母も知っていて残念に思っているということ。
- イ 私をよろこばせるために、実際のキトよりも美しい街のように話していたとわかったこと。
- ウ キトは空想の街だと思っていた私の確信が正しいのかどうか不安に感じているということ。
- エ 長い間しまわれていたキトの写真が古びてみすばらしくなってしまったということ。

問十九 空らん《 x 》《 y 》にあてはまる言葉を次のア～オの中からそれぞれ選び記号で答えなさい。記号は一度しか使えません。

ア やすやすと イ とうとうと ウ ありありと エ きれぎれに オ からからに

問二十 15 どこにも出かけたことのなかった祖父母に豊かな旅の記憶があったことに私はおどろき、やがて甘い花のかおりで胸の中が満たされていくのを感じていた から、「私」のどのような気持ちかわかりますか。「私」の「祖父母」に対する見方・とらえ方が今までどのような変わったかにふれて、自分の言葉で説明しなさい。答えは左の解答らんに書きなさい。

受験番号



氏名

体裁

カロウ

マガオ

カゲン

標高

問一

問二

a

b

問三
(1)

(2)

(1) 私が

問四

(2)

15

時

問五

問六
I

II

III

問七

問八

7

は

13

といふこと。

問九

問十
①

②

問十一

問十二

問十三

7

問十四
(1)

(2)

問十五

問十六

ということ。

問十七

問十八

問十九
x

y

問二十 答えは 国語 A・帰国 I 六 の解答らんに書きなさい。